
ドンキホーテ・サンチョパンサ

rozi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドンキホーテ・サンチョパンサ

【Nコード】

N1021L

【作者名】

rozi

【あらすじ】

今まで見たことや会った人などを題材に、思い出すがままだからと綴った散文です。

三番町の魔女

『三番町の魔女』

「1万5千円だからイチゴさん」そんな通り名を聞いたこともあるが、大体の人は彼女のことを『みどりちゃん』と呼んでいた。もうひとつ、違う呼び名を聞いたこともあるが、それは忘れてしまっただとしても思い出せない。

イチゴさんにしたって、みどりちゃんにしたってみんな勝手にそう呼んでいるだけで、彼女がそう呼ばれて、ハイと答えるかという、ずいぶん怪しい。

誰も彼女とちゃんとした会話を交わしたことなく、名前以外にも、彼女に関するすべての事柄が「どうやら、そうらしい」「誰々がこう言っていた」という都市伝説と同じ曖昧で、出所不明の噂話の域を出ないものだった。

彼女は一見すると老婆のようにも見えるが、よく見ればまだ存外に若い、40をいくらか過ぎた程度のようにも思える。もし、本人に30代だと言われれば、驚きはするだろうけど、まあ信じるだろう。

言ってみれば、年齢不詳、いくつにでも見えるのだが、その、年齢不詳具合が普通の人とは少し違う。普通の人々の年齢不詳具合なんでもものは、服装や髪型、肌の質感といった、望めば誰でも手に入れられるような表面的なものでしかないが、彼女のそれは、そんな付け焼刃的なものじゃなくて、もっとこう、根本的なもの、有名人で言うところのミック・ジャガーや美和明宏に通じるような、誰かに「彼女は700年生きている」なんてくだらない冗談を言われ、しょうがなく適当な愛想笑いを返してあげた後、ふと、心のどこかで“もしかしたら、それぐらい生きててもおかしくないな”と思ってしまうような感じがあった。

ひとつの季節に、ひとつかふたつしか服装にバリエーションがなく、冬場だけでなく、夏の暑い日にも、胸の前で腕を組み、寒そうに肩をすくめて歩く。平均よりも背が高いせいで、人波の中でも、姿勢が悪く、不恰好な彼女の歩き方は目についた。

とある地方都市の繁華街にある、ボクが働いていた立ち飲み屋は、1階で大きな通りに面している。窓は大きくガラス張りで、店の中が街灯やネオンに照らされた表の通りよりも暗いせいで、とにかく外がよく見えた。ボクは店の中から嫌でも毎日、客を捕まえようと一晩中街をうろつく彼女の姿を見ていた。

ほかの客引き　キャバクラやホストクラブ、モグリの売春屋、夜の街角に立つ雑多な面子の誰よりも、彼女は早く街に現れ、そして誰よりも遅く、時に東の空が、完全に明るくなるまで、彼女は到底、その風貌では捕まえられとは思えない、客を探して徘徊していた。

まだ、ボクが夜働く前、映画館なんていう健全な場所で、これまで健全な学生連中に混ざり働いていたところ、信号待ちをしているときに彼女に声を掛けられたことがある。

「こんにちは」

滑舌が悪く、見た目どおり醜い声。そして、それを恥じているかのような小さな声だった。

ボクが彼女を見たのは、そのときが初めてだったが、温泉街で育ち、実際の人生経験に反して、やたらそういうことには擦れていたボクは、彼女がどういった人かすぐに分かった。

彼女は道に迷っているわけでもなく、信号が変わるわずかな合間、人との一期一会の会話を楽しみたい分けでもない。

ボクが目を伏せて、軽くお辞儀を返すと、彼女はそれで脈なしと察して、またトボトボとどこかへ歩いて行った。

その後ボクが、映画館を辞め、夜の世界に出入りするようになる、それまでと比べ彼女とすれ違う機会は格段に増えたが、1度も

「こんばんは」と声を掛けられることは無かった。

たった1度のやり取りで、彼女はボクのことを“こいつは脈なし”と覚えたのだろうか？ そんなことはないと思う。彼女に何度も声を掛けられて「いいかげん覚えるよ」と文句を言っている人を何人か知っているし、1度声をかけて断られたからといって、2度目も3度目も同じように断られるとは限らない。盛り場に集まる男が引つかかるか引つかからないかなんて事は、その日の気分やサイフの中身によって結果が変わる。彼女のような立場の人が、1度断られたからといって、同じ人に2度と声を掛けないなんて理由はないと思う。

これはきつと、水商売を経験したことのある人になら分かってもらえると思うが、夜を仕事場に行っている人間と、遊び場に行っている人間とでは発する匂いに違いがある。ボクが思うに、彼女は長いことその世界で生きてきたことによって、その匂いを嗅ぎ分ける嗅覚みたいなものが、すぐれていたのだと思う。

その後ボクが、例の立ち飲み屋で働き出すと、場所がら日に何度も彼女が徘徊する姿が見えるからなのか、たまたま、そういった嗜好きな連中が多かったのか、彼女のことが話題に上がることが多々あった。

しかし、先に述べたように、そのすべてが出所の分からないものだった。すべてが嘘に思えるし、反面すべてが本当のことのようにも思える。

「姉の命令で16の時から働かされている」「一日のノルマが4万円」「それだと、一回1万5千円なら、計算が合わない」「このまえ、顔にアザを作っていた」「ノルマが達成できないと、姉に殴られるからだ」「泥酔した人間を捕まえて、よくじつ目がさめた客が、隣にみどりちゃんが居るのを見て、びっくりして殴ったんだ」「サービスの為にわざと歯を抜いて入れ歯にしている」「それ、誰々の誰々がみどりちゃんにしてもらったらしいけど、すごくいいって言

つてたらしいよ」「仕事で初体験を失った」

誰も彼女から直接、話を聞いたわけじゃない。それどころか彼女と会話すらしたことが無い。

ある、大学の教員が偉そうに言っていた、「彼女はろくな死に方をしない。いろんな人が色んな病気を持っている。彼女のような人間は、みんなが持つている色んな病気を一身に貰い受け、体を壊し、惨めな死に方をするだろう」と。

実際にそうかもしれない。だけど、ボクにはなぜ彼が、彼女に対する同情の余地を一切見せず、そこまで嫌悪した表情でそんなことを語るのか分からなかった。

ある日、店で泥酔したお客さんが、わけの分からないことを叫びながら、やじろべえの様にゆらゆらとゆれる体のバランスを何とか保ち立っていた。ほかのお客さんはみんな、最初はその男性のことを面白おかしく見ていたが、そのうちに面倒くさくなり、帰らそうとし始めた。

そこへ、たまたまみどりちゃんが店の前を通りかかると、酒が入って多少は気の大きくなっていた連中が、彼女を呼びとめ、「お客さんだよ。連れていきな」と泥酔した男性のことを突き出した。

彼女は、例のか細い声で「酔っ払いはいらぬ」と言うと、そそくさと去っていった。

彼女はきつと、ボクの働いている店のことを嫌いだろつな。そう思っていた。前記したように、店の中からは表がよく見えたが、外を通行している人からも、そのことは良く分かった。

彼女のように、自分を買ってくれる人を求めて一晩中街を徘徊している人間にとって、その姿をジロジロと見られるというのは気分がいいものではないだろう。

それに、夏場なんかは店の引き戸を開けっ放しにして、店内と外の境目を曖昧にしていた。そのせいで、これまた前記のように、酔

つて気持ちの大きくなつた客が、からかい半分に彼女に声を掛けることも多々あつた。

なので、深夜に閉店の準備をしているボクに、彼女の方から「大変ですね」と友好的な声で話しかけられたときには少し意外に思つた。

その時ボクは、たちの悪いお客さんを何とか追い返し、ようやく店の掃除に取り掛かつたところだつたのだ。

気づかなかつたが、どうやらお客さんとのやり取りを見ていた彼女は、「大変ですね」ボクにその声を掛けてきた。

「お疲れ様です」たしか、そんな風な言葉をボクは彼女に返したと思つ。

「このお店つて、ワンショットごとにお金を払つて、お酒を頂くつて感じなの？」

「そうですね、先払いでお金を貰つて、チャージとかは無しで……」
「東京とかに良くあるスタイルよね」

このフリーズは、ボクの印象に強く残つた。

彼女が生まれた時からここに居て、死ぬまで毎日この地方都市の繁華街に立ち続ける。そう想像するのは難しくないが、東京に良くあるスタイルを知っている彼女を想像するのはひどく難しい。

「オーナーが元々、東京に住んでいて」細かな内容は忘れたが、ボクと彼女は少しばかり世間話を交わした。彼女は長話をするでもなく、そつけない分けでもなく、実に良識的なタイミングで会話を切り上げ去つていった。

別れ際にボクは、「よかつたら、今度飲みに来てください」と声を掛けたが、店の片付けの続きをやりながら、もし彼女が本当に飲みに来たら、「同じグラスを使うことを」もしかしたら店内に居るだけでも、ほかのお客さんが嫌がるだろうな” “店に入れたらオーナーに怒られるかな” などとそんなことを考えた。

会話をかわして以降、ボクは彼女とすれ違ふときに「お疲れさまです」なり「こんばんは」なり、何かしら挨拶をするようにしたが、

彼女は口の中でゴニョゴニョと挨拶らしきものを唱えるだけで、いつも空中を見ているような定まらない視線をこちらに向けてることもなく、不恰好な歩き方の歩幅を緩めることもなく、スタスタと行っ
てしまう。

その光景は一見、少しばかり頭の足りない彼女は、ボクのことなど覚えていない風に見えるかもしれないが、ボクには、“人前で、私なんかには気安く話しかければ、あんたの噂に関わるよ”彼女はそんな風に言っているように思える。

愛しき劣等生

季節外れの話題で申し訳ないが、毎年クリスマスシーズンになると、夜道を飾るイルミネーションなんかを見ながら、ふと思い出す人が居る。

かといって別に女の子の話ではなく、クリスマスにこれといってロマンチックな思い出のないボクは、どういう因果か上田という、ボクより2つか3つ年上のむさつくるしい男のことを思い出す。

ガツチリした体格で、背はボクより低く、たぶん170センチぐらい。

仕事はまあ、その日を生きたために色々とやっていたが、定職は持たず、最後に会ったときには中古で買った3万円の軽自動車に住んでいたのも、正真正銘、『住所不定、無職』と名乗って差し支えない男だろう。

知っている限り、彼は探偵の助手やホスト、ヤクザの経営する建築会社で奴隷のようにこき使われたり、キャバクラのボーイをやったりしていた。

ボクは上田の仕事振りというのを見たことはないが、学歴がなかったり、分けあって長いことフリーターをやってる人間や、就職する気のないプロのフリーターと呼んでもいいような人間は、総じて意外に仕事ができる人が多いし、上田と一緒に働いたことのある人から話を聞く限り、彼もそれなりに仕事は出来たみたいだ。

しかし、どうにも天性の性分でも言うべきか、何をするにも常に抜けたところがあって、探偵をしていたときは、車で尾行をする際に、交通違反をしまくって1ヶ月で免停になり、ホストをしていたときは、大して強くもないのに酒を痛飲し、酔っ払った勢いでピルの2階から飛び降り骨を折ってしまい、店のオーナーが病院に見舞いに来たときに、

「大丈夫です！ もうすっかり良くなりました！ 見てください、

もうこんなにピンピンしてますよ！」

と言いながらベットのの上に立ち上がり、なぜかズボンとパンツをずり下ろし、股間を見せ、見舞いに来た人たちに「あいつ頭打ったのかな？ 全然、大丈夫じゃないよな？」と余計に心配させてしまい、建設の現場では釘を叩こうとして反動をつけた拍子に、金槌の反対側で自分の目を強打し青タンを作り、キャバクラのボーイでは少しばかり仲良くなったキャバ嬢とのありえないロマンスを妄想し、「8歳も年が違うからなあ、ジェネレーションギャップって言うの？ 会話が合わないと思うんだよ、やっぱ最初のデートはダブルデートみたいな感じで複数で行動した方が間が持つって言うか……」と無駄な時間を浪費したりした。

まあ、人から見ればバカに見えるというか、憎めないところを存分に持っていた。

ボクと彼の関係は、単純に言えば『友達』という一言になる。決して親友だとかそんな大それたモノではなく、やはり友達という表現が一番あてはまるのだろうが、何となく、それだけだと、ボクが彼に対して持っている気持ちはどうにも表現しきれない。

彼はバンドをやっていて、それは流行の音楽や、万人に受け入れられやすい性質の音楽ではなかった。

ハードコアというジャンルを、ボクは彼と知り合ってから初めて覚えた。ドラムを叩く彼の姿には、学生がやっているバンドのような無邪気に青春を楽しんでいる輝きも、社会人が余暇に人生を楽しんでいるようなリラックスした趣もなく、行者が人生の意味を求め、不亂に苦行をおこなっているような、身を切る迫力があつた。

心の中に、この道で生計を立てたいと言う思いはある物の、やはり同じ心の中にそれは無理なことだと現実を見る目がある。

もしかすれば明日には、来週、来年には、何かが変わるかもしれない。心の中の葛藤を抑え、そう言い聞かせながら夢を見続けるうちに、気づけばもう引き返せないところまで来ている。進めば棘の

道、引き返せば、これからの人生ずっと、引き返した分だけ他の人の後塵を拝して進まねばならない。

ボクは小説家になると決めたものの、どうにもその目途が立たず、彼はドラムで生きて行きたいと思いつつも、その目途が立たず、お互いに就職する気は無かった。彼の方がボクより年上だったので、悲壮感が強かった。ボクはそんな彼に親近感を覚え、そして自分の数年後を見るような思いがした。

ボクと上田は、そんなに密に連絡を取っていたわけではないが、ある日、上田が酒の席の揉め事で怪我をしたと噂を聞いたので、すこし心配になり電話を試してみた。

すると上田は、田舎育ちの人らしい呑気な喋り方で、事情を説明してくれた後、「今からライブがあるから、暇ならおいでよ」とボクのことを誘った。

その日のライブは、地元で一番大きな花火大会と日にちが重なっており、ただでさえ日頃から観客の少ない、アマチュアバンドのライブの中でも、一際観客が少なかった。

割と早かった上田たちのバンドの出番には、ボクと上田の彼女、他には3人が4人ぐらいしか観客は居なかった。

上田が演奏の合い間に言った、「三津の花火に負けられないような、でっかい花火を、俺たちで打ち上げようぜ」という言葉が虚しくライブハウスに響いたのを、今でも記憶している。

彼の出番が終わったあと、カウンターでお酒を飲みながら、世間話をあれこれとしていたが、上田が不意に、「どことこのビルの屋上から花火が見えるから、3人で見にいこう」というようなことを言い出した。

ボクは上田の彼女に遠慮して「3人で？ 2人で見てきなよ」と言ったが、上田は意味を勘違いしたのか、近くに居た、すごいブサイクな子に「花火見に行く？」と声をかけ2×2にしようとしたが、あっさりと断られた。

結局、上田に言われるがまま、彼の彼女と3人で、ライブハウスの近くのビルに昇り、屋上から、遠くにかかる、小さい花火を見た。この、上田の彼女と言うのが、当時、上田が持っている唯一の価値あるものと言っても良かった。

上田よりもさらに年上で、30前だったはずだ。上田と付き合ってから3年だか4年で、女の人としては重要であるう20代後半を上田のために過ごした。

なんだったか忘れたが、ちゃんとしたお昼の仕事を持っていて、情が深いしっかりした性格で、上田のことを保護者のように見守っていた。

ある時、ライブハウスで彼女と話したときに、「(上田は)お金にならん事ばかり頑張っている」

と彼のことを、ぼやいた。ボクが「でも、才能あると思うよ」「ステージでドラムをセツティングする上田に視線を送り、そう返すと、「やっぱり、そう思う！ ぜったいに才能あるよね！」と、彼女は本当に嬉しそうな笑顔をした。

性格や生活態度を非難されながらも、それでも才能を愛されるといふのは、ミュージシャンに限らず、表現者にとって、もっとも嬉しいことのひとつではないだろうか。

ボクの中では、上田にこの彼女がいると言うのは、一種の救いのような思いがあったので、ある日久しぶりに会った上田から、彼女が上田を置いて九州の実家に帰ったという話を聞いたときは、すこし切ない気持ちになった。

実家に帰ったといっても、彼女と上田は別れたわけではなく、彼女は上田が彼女の地元に来ることを望み、向こうでは知り合いのついで、上田に郵便局の仕事を準備しているらしい。

彼女の地元に行ったってバンドは出来る。街の規模だって、いま居る田舎町と比べて、そう変わるものではないだろうし、郵便局の仕事も、現在、上田がやっている日雇いの労働と比べればウンとまじだろう。

上田はこの時28才で、高校を卒業してからすでに10年が経過し、彼女は30を過ぎていた。ひとつのキツカケとして悪い話ではないと思う。

しかし、上田は彼女の後を追うことはしなかった。

それまでと同じように、四国の田舎町でドラムを叩き、大きな声でひとに言うわけではないが、心の中では、なんとかこの道で食べて生きたいと思いつながら、生活のため、誰も好んでやりたがらないような仕事を毎日こなした。

ボクらのようなバカよりも、少しだけ要領よく生きている人には、まったく理解できないかもしれないが、ボクには上田のこの選択の意味が、なんとなく感覚的に分かった。そして、その不器用さを愛した。

その年の12月23日に、上田から金を貸してくれと頼まれ、ボクは彼に1万円ほどかした。その日は、彼が毎月1度か2度おこなっていたライブの日で、ボクはお金を貸しに行くついでに、ライブハウスに足を運んだ。

いつもは、まあオシャレと言うほどでもないが、それなりに気を使った服装をしている彼が、その日は破れた作業着を着ていた。

聞くと、仕事が遅くなり、着がえる間もなく来たそうだった。破れているのは仕事中に岩が落ちてきて下敷きになったと言っていた。

ボクから見れば、雑然としたハードコアのイベントの中で、その格好はいうほどおかしな物ではなく、むしろスーツなんかよりはよほど、その場に合っていたように思うが、上田はしきりに自分の服装を恥ずかしかった。

今日はリハーサルも出来てないし、疲れているから早く帰りたい。そんな風なことを上田はいい、その日、上田の演奏は明らかにいつものような覇気がなかった。

「ほんとはマナーが悪いんだけど」

そう言いながら、彼はその日、対バンの演奏を聴かずに、早々と

ライブハウスを後にした。

「出来れば、ロージの家に泊めてくれないか」と言われていたボクも、上田と一緒にライブハウスを出て、ボクの汚い自転車を2人乗りし、交代で自転車を漕ぎながら、ボクらは家路に着いた。

途中、彼は自転車のギアを使いこなすテクニクを自慢したり、この前、職場の金庫から金を盗んで以来ツキに見放され、やつぱり人間悪いことをするとバチがあたるんだなと後悔していること。クリスマス飾り付けをしたコンビニを見かけた拍子に「そうか、今日はクリスマス・イブ・イブだッ。イブイブってなんだよ!? イブだけで十分じゃねえか、どうせカップルなんて毎日クリスマスみたいなもんだろ!」そんなことを言った。

ボクは彼の漕ぐ自転車の後ろに乗りながら、夜中に、ボロボロの作業着をきた28のオッサンと、いかにもフリーター然とした25のオッサンが、クリスマスを目前に控えた街中を2人乗りの自転車で走る姿というのは、なんて絵になる光景だろうと、皮肉でも嫌味でもなく、本心でそう思い、悦に浸った。

途中で、2人とも晩ご飯を食べてないことに気づいたボクは、彼に「おごるから」と誘いバーミヤンへ行った。

肉体的、経済的に弱り、それゆえ当然、精神的にも弱っていたであろう上田は、たかだかラーメン一杯のことで、まるで命の恩人に感謝するかのごとく、ボクに礼を言いながら食べた。

帰り際、たまたま別の席に知り合いがいた上田は、軽く挨拶程度の会話をし、分かれた後、ポツリと「こんな格好見られたくなかった」と、ライブハウスにいた時どうよう自分の作業着姿を嘆いた。

ボクはその頃、実家に住んでいたが、実家と言ってもそう立派なものではない。四畳半でいどの狭い部屋が3つとキッチンがある古いコーポの2階に、母親と弟、そして母の彼氏と一緒に4人で住んでいた。

狭いうえに収納のないボクの部屋は、大半が、どうでもいいけど

捨てられないものに占拠されていて、スペースというものがない。それに布団もひとつしかないので、内心どうやって寝ようか考えていたが、ひどく疲れていた上田は、部屋に上がると、あつという間にまだ敷いていない布団をクッションの代わりにしてもたれかかり、いびきをかき出した。

ボクはしかたなく、その日はキッチンの椅子をベットの代わりにして寝た。

翌朝、上田はボクがキッチンで椅子を並べて寝たと知って、あやまった。「ロージ、てつきりヨコで寝るかなと思つてた」彼はそんなことを言つたが、ボクは正直、あんな狭い場所で上田と抱き合うように寝るぐらいなら、キッチンのほうがだいぶマシだと思つた。

つぎの給料が入つたらお金を返すと、彼は言っていたが、それよりも大分早く、貸した翌日の晩に、上田から今日金を返すと連絡があつた。えらく早いなと思ひながらも、ボクがバイトが終わる時間と今日は年に1度か2度ある、どうしてもオムライスが食べたい気分の日だということ告げると、11時過ぎに、ボクのバイト先の近くにあるダイニングバーで上田と会うことになつた。

約束をした後に、今日はクリスマススイブだということを出し、店はカップルで一杯かなと思つたが、行ってみると、さすがパツとしないフリーターが行こうと名前をあげる店だけあつて、特別な夜にわざわざこんな店に来ているカップルは居なかつた。

ジャージ姿でやってきた上田は、会話もさておき、真つ先にお金をボクに返した。昨日貸した1万円が、2万円になつている。

ボクが「利息なんかは受け取れない」と言うと、彼は「実はロージに金借りて、さつきまでスロット行ってたんだよね」と言い、「だいぶ勝つただけ、昨日借りた1万円ががなかつたら、この金もなかつたから、遠慮せずに受けとつてよ！」ご祝儀だと思つてさと、ボクのポケットにお札を突っ込んだ。

そして、「ロージのおかげで、また運が向いてきた！ せっかくだから飲もうよ」と、昨日までとはうって変わり、上機嫌にお酒を注文した。

最初はしきりに、「こんなだったらジャージで来るんじゃないかな」と昨日同様、自分の服装についてボヤいていた上田だったが、お酒が入ると、すぐにそんなこと忘れ、陽気になり、いつの間にかほかのお客さんとも仲良く騒ぎ出した。

ボクはかなり深い時間まで、上田に付き合ったが、もう、そろそろ放って帰ろうかな？　　と思い始めた矢先、彼はベロンベロンになりながらも、「オレ帰らなきゃ」と立ち上がった。

店の前で、彼と別れる前、ボクは今日も上田が家に泊まりに来たがるかと思っただ、彼は「じゃあね、ありがとう」と手を振り、ボクとは反対の方向に歩き始めた。

この頃の上田は、家がなく車の中で生活しているのを知っていたボクは、彼がこのままでここで寝るのかを想像して、少しばかり心が痛んだが、声をかけ彼を引きとめ、家に来いよとは誘わなかった。

きっと、自分の寝る場所のことを考え、躊躇したんだと思う。ボクは上田のことを好きだし、その生き方にある種の敬意みたいなものを持っているが、結局はその程度。こんなんじゃないとも親友と呼べるほどのものじゃないと思う。

その後、上田はしょっちゅうボクの家に来るようになったが、狭い部屋に遠慮したのか？　泊めてくれと言うことはなかった。ただ夜の仕事に行くのに、昼間肉体労働をした体のまま行くわけにはいかないのです、シャワーを浴びに来ていた。

一度、上田が風呂上りに上半身裸のまま、ボクに新しく買った電動シェーバーのすごさを力説しているときに、近所の焼き鳥屋で飲んで、上機嫌になった状態のボクの母親が帰ってきて、上田の肩にあるタトゥーを見て絡みだした。

母は「どこで入れた」「誰が入れた」だの「いくら掛かった」だ

のと質問し、上田の答えを待たずに、シャツの襟を下げ、自分の肩にあるタトゥーを「こっちのほうかスゲーだろ」と自慢しだし、ボクと上田のことを少し引かした。

それでもボクは、そんな母を見ながら、たとえ部屋が狭かろうが、親がみようちくりんだろうが、知らないオジサンが住んでいようが、バカな息子を受け入れてくれる実家があるというのは恵まれていることだと切に思った。

年齢の問題だけでなく、この点でもボクは上田の悲壮さにはかなわない。

それまで、そんなこと気にしたこともなかったが、上田の肩にあるタトゥーは、今のバンドを結成するときに、気合を入れる意味を込めて、意を決して入れたものだ、この時に知った。しかし、そのバンドも、すでに解散することが決まっている。上田はそう付け足した。

解散した後、どうするのかと、ボクは上田に聞いた。今考えれば、彼女のところに行くなり、就職しないまでも、仕事をし、お金を作り、もう少しまとめた生活基盤を作ることと専念するなり、上田の答えは幾通りか想像できるが、そのときは、ボクがそんなこと考えるいとまも無いほどすぐに、「もう、すでに新しいバンドのメンバーが決まっている」「と彼の答えが返ってきた。上田は新しいバンドのメンバー構成や、目指す音楽性について語った。

その後、ボクは上田にまた2回ほどお金を貸した。一度目は「2千円でも3千円でもいいから貸してくれないか」と言われ、1万円を。それは彼の給料日に返ってきた。前のように金額が増えていることはなかったが、お礼に晩ご飯をおごると言われ、いつぞや2人で行ったバーミヤンで、テーブルを2つ使ってもおさまりきらないぐらい、バカみたいにオーダーし、2人とも吐きそうになりながら無理して全部食べた。

2度目も、同じように「いくらでもいいから」「と言われ、ボ

クは1万円を貸した。「来週返す」上田はそう言っていたが、翌週彼からの連絡はなく、そのまた翌週も連絡はなかった。それまでしょっちゅう借りに来ていたシャワーも貸してくれとは連絡してこなかったし、ライブがあるから見に来ないか？ という誘いもなかった。

性格的にお金を返すまでは、ほかに用事があっても連絡してきにくいのだろう。

ボクは、「彼はきつと、またツキに見放されている日が続いているんだろうな」と少し心配した。家に来なくなってから、上田はどこかでちゃんとシャワーを浴び、髭を剃っているのだろうか？ 新しいバンドは順調に進んでいるのか？ そんなことが気になったが、「まあその内、元気に連絡してくるだろう。その時は多少なりともツキが上向いてきた時はずだ」そう思いながら、気長に彼からの連絡を待つことにした。

気づけばボクは、呑気に4年も彼からの連絡を待っていることになる。その間に当時の彼の年齢を越し、彼と同じようにツキに見放されたり、理解者を得たり、ちょっとしたこと、運が向いてきたと思い、これからはすべてが上手くいくんじゃないかと幼稚に喜んだり、初めから引き返すつもりなんてないのに、一瞬だけ悩んでみたり、仕事をコロコロ変えたり、人からお金を借りたり、レジからお金を盗んであとで後悔したり、余裕もないくせに見栄を張ったりしている。

まさに数年前に見ていた、彼とおんなじ様な人間になっていると思う。

終盤にさしかかり振り返ると思うのは、ボクらのような生き方をしている、20代というのはいよいよ変化が多い。10代のころなんかと比べてずっと多いと思う。

今では上田の連絡先も分からないし、彼とボクには共通の知人が何人か居たのだが、みんなそれぞれに環境が変わってしまい、上田

のうわさを聞くこともなくなっていました。

今、どこで何をしているのか分からないし、まあ、正直ふだん彼のことを思い出すということも滅多にないのだが、それでもボクは今年もクリスマスシーズンになると、ふと彼のことを思いだし、もしかしたら30をいくらか過ぎた上田から、不意に「今から金返しにいくわ」「あるいは「悪いんだけど、お金かしてくれないかな?」「そんな電話がかかってくるんじゃないかと、楽しみにしてしまうだろう。

ちゅうちゅう、たこ、かいな

「ちゅうちゅう、たこ、かいな」

まったくオカシな言葉である。なにがオカシイと言って、言葉の響きもさることながら、てんで、意味がわからない。それでいて、馴染みがないわけではなく、知っている言葉なのである。

しかし、自分がどこで、この言葉を覚えたのかが分からない。テレビなのか、小学校なのか、そのどちらかのような気がするが、どちらも記憶にない。

言葉を覚えるなんてことは、そんなものかもしれないが、どうにも心地が悪いのは、テレビにしたって、幼少期に誰かが言っているのを聞いたにしたって、どちらもイメージがわからないのである。

ために、ブラウン管越しに、この言葉が流れてくる様子や、子供時分に周りにいた、そう言ったことを言いそうな、クラスのひょうきん者や、近所のオヤジなんかの姿を思い浮かべて見るが、どうにも違和感がある。

誰にでも、子供時分、クラスや、仲のいい友達連中なんかの間で流行る、オカシな響きの言葉があるんじゃないかと思う。たとえば、ボクの場合だと、小学校5年から6年生の時に「フルヘッヘンド」という言葉が流行った。「フルヘッヘンド」「フルヘッヘンド」と、意味もなく、みんなこの言葉を言いたがるのである。

「フルヘッヘンド」が流行った理由も、言葉の意味も、ハッキリと覚えている。社会科の授業で、杉田玄白のことを習った折に、氏がドイツ語で「こんもりしている」と言うような意味を指す「フルヘッヘンド」という言葉の意味がなかなか分からずに苦労したというエピソードが出てきたのである。

その授業が終わってから、まるで流行性の風邪のように、「フルヘッヘンド」がクラスの中で蔓延した。

もう、かなり前のことなので、記憶ではなく、自分の中で補正し

て作り出したイメージの様でもあるが、今でも先生が教壇で教科書片手にクソ真面目な表情で「フルヘツヘンド」と言っている姿も、わんぱくな男子が、天然パーマのクラスメートに向かって「お前のアタマはフルヘツヘンドしている！」と言いからかっている姿も思いたすことが出来る。

これを飛躍させて、実際にあつたことではなく、無かつたこと、例えば最近知り合つたばかりの人間が、「フルヘツヘンド」と言っている姿を妄想してみると、わりと難なくその姿を思い浮かべることが出来るのである。

自分の親が「フルヘツヘンド」と言っている姿も、議員さんが選挙カーの上から「フルヘツヘンドがなんたらかんたら」と言っている姿も想像できる。「その時歴史が動いた」の中で松平アナが「フルヘツヘンド」と言っている姿も、ホリケンが深夜に「フルヘツヘンド」と言いながら、はしゃいでいる姿も想像できる。AKB48の新曲が「フルヘツヘンド」だったとしても問題はない。家で飼っているうさぎの名前が「フルヘツヘンド」だとすれば、今の名前よりずっと良くなると思う。

それと比べて、「ちゅうちゅう、たこ、かいな」は、誰かが口にしている姿を妄想するのが実に難しいのである。どういつ分けか、ボブ・サップやボビー・オロゴンといった手合いが、おぼつかない日本語で「チュウチュウ、タコ、カイナ」と言っている姿がかるうじて妄想できるぐらいである。

まあ、「フルヘツヘンド」と「ちゅうちゅう、たこ、かいな」では語呂や響き、意味合いといった言葉の質がまったく違うからだ、と言われてしまえば、それだけの事かもしれないが、それにしたつてである。他にもオカシナ言葉と言つのは沢山あつて、「じゅげむ、じゅげむ、ごころの〜」だとか、「ざんす、ざんす、さいざんす」「テクマクマヤコン、テクマクマヤコン」ほかに「ガチヨ〜ン」やら「チムチムニー、チムチムニー」など、いくらでもあつて、それらは、だいたい、脳内でだれか適当な人物を選んで、その人に発

言させてみても、その姿が違和感なく想像できるのである。

どうにも、「ちゅうちゅう、たこ、かいな」だけは、誰もが知っている言葉ながら、誰かが、その言葉を発していると考えると、むしろがゆい違和感を覚える。

もしかしたら、意味がまるつきり分からないことが原因かもしれないと思ひ、落ちついてその意味を考えてみた。

上記したほかの言葉も意味不明といえば、意味不明だが、それでも、「じゅげむ」なら、落語のネタで、人の名前である、「ざんす」はトニー谷のネタ、アッコちゃんに谷啓、メリー・ポピンズと、その言葉の出どころを知っているし、歌詞なのかギャグなのか、はたまた変身するときの呪文なのかといった事も知っている。それだけ分ければ、どういった場面で使えばいいのかといった事もおおよそ分かる。しかし、「ちゅうちゅう、たこ、かいな」だけは、どうにも使い道と出どころが分からない。

最初、「タコ」は海の中にいる八本足の生き物、蛸を想像し、「かいな」と言うのは「なのかな？」の関西なまりだと憶測した、ここまでで「蛸なのかな？」と疑問に思っている関西人の姿が浮かび上がってくる。じゃあ、「ちゅうちゅう」とはなんだろう？ そう考えて一番最初に思い浮かんだのは、何かを吸ってる時の擬音だった。

これを、つなぎ合わせて、ボクが想像したのは、関西人が何かスルメのような物体をしゃぶりながら、「これは、タコなのかな？」と疑問に思っている姿だ。

まあ、そういう意味ととれなくもないが……、仮にそうだとしたら、だから何なんだろう？ 先ほどまでとまた違った、さらに深い意味でこの言葉の意味が分からなくなる。

こんな、くだらないことに時間を費やして、誰といわず、世間の人に対して、なんだか恐縮した気持ちになるが、どうせなので恐縮ついでに、さらに考えると、「たこ（蛸）」は「凧」に置き換える

ことが出来る、そして、「かいな」は、そのまま「なのかな？」
「ここまで、想像すると「ちゅうちゅう」の「ちゅう」は、「空中」
の「宙」なんじゃないかなという考えが浮かんでくる。すなわち、
「宙々、凧なのかな？」今度は空を見上げながら疑問に思っている
関西人だ！

こっちの方が、さっきの蛸なのかスルメなのか分からない物体を
しゃぶっている関西人よりは、じっくりくる。しかし、仮にそうだ
として、だから何なんだろう？ やはり行き着く先はそこである。
ここで、考えを休めて、まあ、初めからそうすればよかったのだ
が、ネットで「ちゅうちゅう、たこ、かいな」の意味について調べ
てみた。

どうやら、「ちゅうちゅう、たこ、かいな」と言うのは、数え歌
で、「ちゅう、ちゅう、たこ、かい、な」の区切りで数えていけば、
「二、四、六、八、一〇」と同じ要領で、物を二つずつ数えられると
のことだ。

言葉の意味や出所については、諸説あるようなので、気になる人
は自分で調べて見ることをお勧めするが、どれも、納得いくよう
であり、またどれも、しっくりこない感じもする。

使い道もわかって、言葉の由来にもいくつか目を通したが、結局、
ボクがこの言葉に対して持っている、違和感が無くなることもなく、
相変わらず「オカシな言葉だなあ」といった思いを払拭できない。

何よりも、一番オカシイのは、ボクはこの言葉を思い出すと同時に、
人の優しさを思い出し、あつたかい気持ちになることだろう。

つい、最近のことだが、ボクは旅先でお金が無くなり、しかたな
しに、とある観光ホテルに住み込みで働いていた。リゾートバイト
と言うヤツで、繁忙期だけの短期間の仕事だったのだが、つい最近
のことと言うのが問題で、世間一般では、ボクぐらいの年になると、
ある程度、生活の地盤を築いているものだ。本来なら、こんな経験

は、最近ではなく、7年ほど前にすませとかなければいけない。まあ、でも、今更7年前に戻れるわけでもなく、年令どうのこうのと云った話をしてみても、あくまで「世間一般ではそうだろう」というもので、ボク自身は、あまり年令にこだわって生き方を考えたりするのが好きではないので、気にしないようにはしているのだが：、とにかく、30前にして、派遣で住み込みの仕事に行ってみると、そこにはボクと同じ年の主任がいた。

この主任と言うのが、なかなかクセの強い人で、いろいろと問題があるのだが、細かく書けば長くなるし、面白くも無いので端折るが、まあ、ボクはこの人のことが嫌いだった。

嫌いでもなんでも、一緒に働くわけだし、まがりなりにも彼に仕事を教えてもらい、世話になる立場なので、出来るだけ仲良くしよう、好意的な目で彼のことを見ようと努力してみたのだが、どうにも苦手ではない。

ボクなんかは、根っからの子分気質なので、たとえ相手が厳しい人でも、怖い人でも、シツカリした人ならば、怒鳴られたり、キツくあたられたりしても、それほど苦にすることなく耐えられるのだが、相手のことを、厳しいでも、怖いでもなく、気持ち悪いと思ってしまうと、もうダメなのである。この主任がただの厳しい人であれば良かったのだが、ボクは彼のもつ幼児性が気持ち悪くしてしまうがなかった。

彼もまた、ひとりの劣等漢だが、その幼児性ゆえに、自分の劣等を認めることができずに、全てにおいて、自分ではなく会社が悪い、世間が悪い、自分はこの間に優れているのに、周りが無能ゆえ、自分が優れているという事さえ理解できない。そういう風に答えを持っていつてしまうのだ。

屈託やら劣等感と言うのは、実に味わい深いもので、みな大なり小なり持っている。それがあからこそ出てくる、人の魅力というものがあるとボクは信じているが、反面、それを上手く消化できなければ、その人は困った人になる。

ホテルの中で、ボクの仕事はバイキング形式のレストランで料理を補充することがメインだった。

まあ、仕事の内容は単純で、簡単なことだが、これが、メチャクチャ忙しい。補充する人員の数と比べて、料理の数、お客さんの数が釣り合っていないのだ。

ひとつの料理の残りが少なくなってきたら、補充する分を、いくつかある冷蔵庫、冷凍室、温蔵庫、または、調理場まで取りに行くのだ。冷蔵庫や冷凍室が複数あるだけじゃなく、調理場も二ヶ所あるというのを伝えておけば、一日にどれぐらいの量の料理を補充しなくてはいけないか分かってもらえるだろうか？

その日は、入り口でお客さんの受付をする主任と、席への案内やアルコールなんかのバイキングとは別料金となる物のオーダーを取ったり、運んだりするホール係が2人。料理の補充はボクと、仮に「ひよこ」とでも呼ぼうか、カリメロに似た50前後で入社10年目の人が担当だった。

それと、もうひとり、本来ならレストランの人員ではないが、慢性的に手伝いに来ている「前川」さんと言う、なんとなく知的な感じの人が、ホールと料理の補充の様子を見ながら両方手伝うという構図だった。

これは、ただでさえ人手が足りてない普段と比べて、従業員の数がさらに少なかったので、やる前から「忙しくなるんだろうなあ」と予想していた。

レストランの営業が始まるとともに、行列が出来ているという分けてはないが、お客さんがパラパラと何組か続けて来た。

すると、すぐにホール係と前川さんの3人だけでは、案内が間に合わなくなった。入り口でお客さんが、案内係が来るのを待っている状況になるのだ。待つといっても1分も2分も待たされる分けではない、お客さんを席まで案内しているホール係が受付に戻るまで

に3、40秒もあれば事足りると言ったとこだらうか。

元来暢気なボクなんかは、それが、どうしても大したことだとは思えない性格で、それよりも、ホール係が走って受付に戻る姿を、ホテルのレストランという場所の性質上、どんなに急いでいても、歩いたほうがいいんじゃないかと思いつながら、眺めていた。

しかしまあ、出来るだけ待たさないほうが良いことに間違いはないが。

「ご案内お願いします！　ご案内お願いします！」そんなこと、改めて言われなくても、ホールの人はみな分かっているが、たとえ1秒でもお客さんを待たすことに我慢ならない主任のイラついた声が、インカムから聞こえてくる。

この人は時折、普段喋っているときの声とインカムで会話するときの声が違うことがある。まるで、鼻をつまんで喋っているような、少しこもった、映画の吹き替えやアニメなんかで、インテリの悪役キャラみたいなの、声、喋り方になっている時があるのだ。

「ご案内お願いします！　ご案内お願いします！　早く戻ってきてください！　早く戻って来てください！」

まるで「メーデー、メーデー」と救難信号を送るような切羽詰った感じでそう繰り返される。

そんなに急かされなくても分かってるよ、と言いたげに中国からの研修生が駆けて受付へ戻る。

ボクは、その様子を見ながら、料理の補充で良かったなあと、同じ様に忙しくとも、こんだけイライラする感じで急かされないだけマシだと思いつながら、のん気にサラダの盛り付けをいじったりしていたのだが、その内に、いくら急かせども、これ以上案内のペースが上がらないことに腹が立ったのか、主任が「誰でもいいから来てください！　誰でもいいから受付に来てください！」と怒鳴りだした。

（誰でもというのはボクも含まれているのかな？　でもな、行っても案内の仕事ってなにやったらいいんだっけな、席に案内して……

ああ、席の番号覚えてないや……でその後……とまあ、そんなことを考えながら、こういう時は先輩の様子を見て参考にしよう、と一緒に補充をやっている、ひよこの方を見てみると、彼はボク以上ののん気に、漬物の盛り付けをいじっていた。インカムでの主任の発言はガン無視だ。

まあ、補充というのは後半から忙しくなるので、最初は正直やることがない。

なんとなく、そのキャラクターに親近感を覚え、しかもこの人から仕事を教わることの多かったボクは（ひよこの兄貴が無視してるんだから、ボクも無視でいいか）と、サラダいじりを続けたが、その内に主任は「ひよこさん、ひよこさん、来てください。ご案内お願いします」と名指しでひよこさんのことを呼んだ。実はこの2人仲が悪くお互いのことを嫌っていたので、その言葉の裏に「おい、おまえどうせ補充なんて最初は暇なの知ってたんだぜ。どうせ沢庵でもいじるぐらいしか今やることないんだろ！ いいからとっとと案内手伝いに来いよ、ハゲが！！」という真意が読み取れる。

名指しで呼ばれた、ひよこの兄貴はというと、相変わらずのガン無視である。「あれ！？

もしかして、兄貴のインカム壊れてんのかな」と思うほど微動だにしない。

ひよこは、ひよこで、「うるせーな！ おめえは何をそんなにテンプアってんだ。コレぐらい、忙しいうちにはいらねえだろう、ボケ！！ ゲームの駒みたいに人のことを使うな！」そう思っているであろうオーラが背中から流れている。

実際にこの主任は、いつでも何かと戦っているように、ひとりでは必死になっていた。必死になることは悪いことではない、しかし、もうひとりの主任が仕切っているときは、もうひとり主任が居るといいうのもオカシナ話だが、このレストランには、勤務年数も長く、叩き上げで、人望もある主任と、この、ボクと同じ年で、入社2年目で、社長の甥っ子で、みんなから嫌われ、みんなのことを嫌って

いる主任が居た　もう、一人の主任がいるときは、例え忙しくとも、皆が普段どおりにすれば、完璧とは言えなくともレストランは回るのだが、この、主任だけで、仕切っているときには、どうにもバランスがおかしくなるとも言うのか、みなが普段通り出来なくなるのだ。

それは、この主任が、もう一人の主任にライバル心があり、自分が仕切るときには、意図して、その人と違うやり方をやろうとする時間をかけて培われ自然とそうなたであろうやり方に、反したことを皆に指示するせいもあるだろうし、皆の能力や人員の数を考慮した指示ではなく、自分の理想を優先した動きを周りに求めるせいもあると思う。

それで、上手くことが運ばいいのだが、そうはならないと言うか、動かされる側はいつもより疲れ、主任は主任で、指示している自分の思い通りにことが運ばないことにイライラし、場の雰囲気が悪くなってしまうのだ。

今回のような場合だって、もう一人の主任ならば、一組案内が終われば、ホールのスタッフは言わなくても、受付に戻ってくることを理解しているので、あえて急かすようなことはせず、それよりは、少しばかり待たされるお客さんに、愛想を振りまくことに集中するだろう。

それに、対して、こちらの主任は、急かせば急かすだけスタッフの動きが早くなると思っっているのか、まるで馬の尻にムチをいれる様にインカムで指示を送り続ける。

どちらのやり方が正しいとか正しくないとか言う問題ではない。ただ、ここでは、もう一人の主任のやり方がいつもものやり方で、重要なのはみな、もう一人の主任を本当の主任と認めていた。ひよこだって、もう一人の主任に呼ばれていれば、すぐに受付に向かっていただろう。

それに、連日の激務でみな、もうムチを入れられる余地のないぐらいに疲れていた。

呼んでも、ひよこが応答しないと悟ると、少し間があつてから、主任はボクでいいから来いと、指示した。

名指しで呼ばれて、無視するほど腹は据わつてない。しょうがないな、と思いながら、ボクはもう一度、案内の仕の内容とオーダーの取り方やら対応を推測しながら、受付に向かったが、途中で、ほかのお客さんの案内を終えた前川さんが、チラリとこちらを見て、「ボクが行くからいいよ」と、そんな感じで受付に駆けていった。見ると、案内を待っているお客さんは一組だけだ。なら、いいかとボクはまた、持ち場に戻り、サラダをいじりだした。

後半に入ると、今度は立場が逆転して、料理の補充のほうが忙しくなる。尊敬するほどマイペースな、ひよこの兄貴と二人での補充は、いつもてもんやわんやだ。

ボクは足りない食材を取りに、厨房の横にある冷蔵庫に向かった。その、冷蔵庫というのが、主任の持ち場である受付の向かい、わりと近い距離にある。お客さんの流れもひと段落した受付では、主任と前川さんが何か話していたが、主任はボクのこと気に気づくと、感情的に怒り出した。

「おい！ 瀬川！ おめえ俺が呼んだらすぐに来いよ！！ 何があつてもぜつてえに来い！！ オレ主任だぞ！！」

「はい、すいません」と、まあ、お決まりの文句で素直に謝つたが、内心、少し驚いた。別に怒られたことや、きついものの言い方に驚いたわけではない。

先にも記したが、ボクはこの人のことが嫌いだったが、それでも一緒に働くかぎりは出来るだけ仲良くしたほうが良いと思い、彼もまた、日本有数の田舎町で、従業員は、ほぼ全員、おなじ社員寮に住んでいるという、独特の閉ざされた環境の中、特に親しく出来る人は周りに居らず、職場でも、みなに嫌われているという状況で、そこに派遣でやって来た同じ年のボクのことを、これはよい話し相

手と思ったのか、仕事終わりや、休みの日　あくまで、彼が休みの日、ボクのシフトは関係なかったが……　なんかによく呼び出されて、うわつつらだけだが、親しく話をしたものだ。

「オレは、タイムカードを押した瞬間に、上下関係はオフにするからよ、プライベートでは、下の名前で呼んでくれ」だとか、「実るほど頭をたれる稲穂かな、ていう言葉が好きだ」とか、彼の仕事に対する考え方、主任イズムを長々と聞かされたり、「俺こう見えて（白い腕を摩りながら）ケンカ最強だから」「高速で250キロ出したことある！」なんて武勇伝を聞かされたものだった。

この、怒られた前日も部屋に呼びだされ、遠まわしに断ったが、あんまり断りすぎると、おなじ寮に住んでいるだけに、ボクの部屋まで来られそうな勢いだったので、しぶしぶ出向き、長々と、安い哲学書に書いているような、当たり前で、そんなこと言われなきゃ、考えなきゃ出来ないようなヤツは馬鹿だ！　と思うような、ありがたい話をコンコンと聞かされていたのだが、その、普段言っている事と、実際の態度が、あんまりにも違いすぎて　そりゃ、みな言っていること、理想と、実際の行動が違うなんてことは多々あるが　正直、「ここまで！！」というほど、彼の自製の利かない感情に驚いた。

ゆっくりと、怒られているヒマも、怒っているヒマも、レストランにはない。すぐに仕事に戻ったが、ボクは胸のうちで「オレ主任だぞ！！」という言葉に咬みついていた。

「ヤロウめ！　ボクのような自分本位で生きている人間に、職場での肩書きなんて、何の意味もないんだぞ！　だいいち、お前はニセモノの主任じゃないか！！」

そう思うが、彼にとって、「主任」という肩書きが、自己を肯定するのに重要な気持ちも、よく分かった。

ボクにとって、「小説家志望」という肩書きと一緒にだ。

「小説家志望」それがなければ、ボクは、ただの思いつきだけで生きている、自分勝手なニートときどきフリーターとなってしまう。

そうなければボクは、自分の存在を肯定できないだろう。

彼も「主任」という肩書きがなければ、パチスロと車で借金を作り、身内に助けられた、ただの馬鹿ぼんに成り下がってしまう。

アイデンティティーを守るためには、是が非でもそこに固執しなければいけないのだ。

そんなことを考えながら、イライラした気分でボクは、なくなったタコのカルパッチョを補充するために、パントリーに戻り、冷蔵庫からタコのカルパッチョと、ドレッシングを取り出していると、逆転してホールよりも忙しくなった、料理の差し替えを手伝っていた、前川さんが、「たこ、たこ」と言いながら、パントリーに入ってきた。

彼もタコのカルパッチョがなくなったことに気づき、補充するためにパントリーに取りに来たのだ。

「タコにドレッシングをかけているボクに気づくと、

「あ、カルパッチョ、今やってる!？」

見れば分かることなので、確認というよりも、無言で立ち去るより、なにか言った方が、感じがいいと思ってそう発したのだろう。

「はい、やっていますよ」

努めて平常どおりの言い方でいうように意識したが、きっと、不機嫌な感じが出ていたであろう。ボクの返しに前川さんは、

「ちゅうちゅう、たこ、かいな、ちゅうちゅう、たこ、かいな
タコよく出るよね」

と、喋りかけるのと、ひとり言のあい間の言い方でそういった。

その、言い方から、ボクに気を使った、あえて陽気に振る舞っている感じが伝わってきた。「あんなヤツの言うことなんか、気にすることないよ。バカでムカつくヤローだって、みんな言ってるよ。

さあ、気持ち切りかえて頑張ろうぜ!」そう言う代わりであるし、そんな風に言われるよりも「ちゅうちゅう、たこ、かいな」と言われた方が、よっぽどよい。

ボクは、(ああ、この人は優しいな。不器用なんだろうけど、い

い人なんだろうな」と思い、なんとも言えず、あたたかい気持ちになつた。

そして、ボクも出来るだけ陽気に、

「そうですね。アイツら（客）ほんとよく、タコ食いますよね！」
と言い、カルパッチョを抱え、ホールへ出て行った。

“ちゅうちゅう、たこ、かいな”の身のある使い方は、数え歌なんかでなく、怒られて、ふて腐れながらタコを運んでいる人間の、気持ちを楽しみたいときに使う。そういう言葉である。

ドンキホーテ・サンチヨパンサ

何となく、『エッセイ』という言葉を使うのが、恥ずかしいというか、テレくさいので、この、『ドンキホーテ・サンチヨパンサ』のことを、なんて呼んでいいのか戸惑うのだが、とにかく、まあ、この散文のタイトルは、甲本ヒロトの曲に『天国生まれ』というのがあって、その曲のなかで、『ドンキホーテ・サンチヨパンサ』という歌詞が繰り返し出てくる。

曲の雰囲気のせいもあるんだろうが、オカシイはずなのに、なぜか哀愁を感じるこのフレーズが気に入って、短絡的にそこから取って、こんな題名をつけたのだが、一応、後付の意味があつて、小説『ドン・キホーテ』に出てくる、主人公ドン・キホーテや、従者サンチヨ・パンサのように、正気を失っていたり、間抜けだったり

どういう訳かボクは、そういう人、あるいは物や事に、なんとも言えない魅力というか、愛着を感じる性質で、おまけにボクの周りには、比較的そういうた、劣等生だったり不器用だったりする人が多くて、そんな人にしか出せない魅力を垣間見れる機会が時折ある。そういった、決して格好良くもないし、立派でもないけど、魅力を感じて、心に残った人や出来事を文章にしておきたいな、という隠されたテーマが、この『ドンキホーテ・サンチヨパンサ』というタイトルに秘められているのだが、今回は、そんな後付の意味を無視して、優等生の話です。

ボクの周りに居る人にしては珍しく、彼女には学があつた。地元にある国立大学の法学部ならば、1位で入試を通つたが、それよりもかなりレベルの高い、全国区の有名国立大学に通つた。そして、本当はとても頭がいいのに、まるでそうは見えない。普通より、少しだけ、バカに見える様に振る舞うほど賢かつた。

大学を卒業するまでの間、実家からの仕送りを一切受けずに、自

分でバイトしてまかになった彼女に、ボクは「キャバクラでバイトしたか？」と尋ねたことがある。見知らぬ土地へ出て、誰からの支援も受けずに、大学をちゃんと卒業しようとするれば、時給がよく、労働時間も短い、そういうった仕事を、選ぶんじゃないかと思った。

「親が悲しむと思ったからしなかった」と言う、彼女の答えを聞いて、ボクは（おやおや、この人は……）と思いながら、奇特な人を見るような眼差しを彼女に向けた。

別にキャバクラで働くのが、悪いことだとは思わない。ボクはホステスの息子だ。

ただ、違和感を感じるのは、今や若い人たちの間で、それが、特殊な仕事だと理解している人が、あんまりにも少ないような気がするということ。まるで、コンビニで働くのと、同じような気軽さで夜の仕事に就く学生が大勢居る。

それに、それまでボクが、何人かの女性から聞かされた、キャバクラで働かない理由は「知らないオヤジの隣に座りたくない」「みんな、それだった。

自分の生理的な感情を大切にしたい、正直な答えだと思うし、「知らないオヤジの隣には、たとえお金を貰ったって座りたくないけど、あなたの隣には、こうして座ってるわよ」という含みが感じ取れて、横にいるバカな男に、優越感を与えてあげることが出来る。なかなかいい答えだ。

しかし、「親が悲しむ」には敵わない。古風で道徳的で、親思い。それに、安易に楽な選択肢を取らない強さと、学生にありがちな、自分たちの世界が世の中の中心だという思い込みに陥ってはず、他の世代、本当に中心を占める世界の中で、その物事が、どういった風に捉えられているかを、理解している知性を感じさせる。

それに、この答えは、彼女の周りの人が求めているものだ。

ボクは彼女のことを知るうちに、かなり本気で、この人は人間ではないんじゃないかと疑ったことがある。本心や気分ではなく、道徳や理想に沿った発言や考え方をする。しかも、その道徳や理想と

というのが、彼女中心の考え方や、勉強が出来るだけのヤツにありがちな、頭でっかちなものではなく、相手が求めているものを 相手がバカでも利口でも、強い人でも弱い人でも 理解し、発言あるいは行動を返す。子どもみたいに振る舞うのも、お姉さんぽくなるのも、真面目を演じるのも変り者を演じるのも自由自在。現実的であつたり、夢見がちであつたり。とにかく、みんなにとっての理想が彼女にとっての理想。そんな風に作られた、アンドロイドか何かじゃないかと思つた。

ある時、たこ焼きを買いにいこうとしていたボクを捕まえた彼女に、ついでにたこ焼き屋の斜め向かいにある店で、おにぎりを買ってきて欲しいと頼まれたことがある。その時の、遠慮がちで、はにかんだ 例えれば、2回しか会つたことのない、うんと照れ屋の子どもが、瓶のフタを開けてくれとお願ひしに来たみたいな 様子を見て、ボクは「ああ、やっぱり人間だったか」と安心したというか、なんだか嬉しかった。

彼女の性質に関係あることで、ふたつ、印象に残っている会話がある。

ひとつは、彼女が見たテレビの中に、元漁師のおじいちゃんと、その奥さん。老夫婦が出てきて、レポーターがおばあちゃんに向かって、「おじいちゃんは男前だから、若い時は、いろんな港に現地妻が居たんじゃないですか？」そんな風なことを聞いたそうだ。

その時におばあちゃんは、揚々と「当たり前よ、あんた。いい男だもん。そんなの当然じゃない」と笑い飛ばしたらしい。

それを見て彼女は、そのおばあちゃんに憧れたという。旦那に浮気された時に、泣いたり、取り乱したりする女になるよりも、おばあちゃんのように「いい男だもん」と言える、どっしりした女になりたいと言っていた。

彼女の、わずかな声の昂揚、何よりも目を見て、それは本心では

ないとボクは思った。旦那に、彼氏に、浮気なんかして欲しくない。それが彼女の本当の気持ちだ。だいち、浮気を容認するような女に憧れるのは男の仕事だ。「浮気をしたら、包丁で脇腹をぶっ刺してやる！」女はそれぐらい言えばいいのに。ボクはそう思った。

もう、ひとつは、子どもの時から優等生だった彼女が、絵画コンクールで表彰されたときの話。彼女は特別、絵が好きだった訳でも、上手かったわけでもない。ただ、大人が好む、「子どもの描く絵」を理解していたそう。子どもらしい大きな構図、色使いを理解して、先生に評価されるように描いたらしい。

ボクはその話を聞いて、すごく納得したところがある。彼女は、今でもその頃のまんま。学年一の優等生。大人のお気に入りなのだ。

彼女のことを知るほどに、見るほどに、ボクは今まで知る由もなかった、優等生の大変さを知るようになった。職場の人、そこで知り合うお客さん、親、兄弟、友達、先輩、後輩、彼氏。みんなにとつての理想というものがある。その理想であろうとすれば、どんどん、どんどん、自分という身勝手な存在のいる枠が狭まってきて、窮屈になる。そして、優等生であるが故に、自らその枠をさらに狭める。

これじゃあ、自分じゃない。やはり彼女はアンドロイドだ。

ボクは中学生の時の写生大会で、学校の屋上から風景画を描いた。転校生だったボクは、他の子の使う水彩絵の具じゃなくて、前の学校で指定だったポオスターカラーを使っていた。

目の悪かったボクは、大体の雰囲気や眼下の民家と山を描いて、絵の具を混ぜて微妙な色合いを作るなんていう面倒くさいことはせずに色を塗った。民家の屋根は大体、灰色か小豆だったので、灰色は青、小豆は赤で塗って、ところどころサービス精神で、黄色と緑を混ぜた。

完成した絵の出来栄は素晴らしくて、何の面白みもない目の前

の風景が、まるで、おとぎの国のように色鮮やかだった。

他の誰よりも早く、完成させた絵を、監視役の先生の所へ持っていくと、到底ボクよりも絵心があるとは思えない、体育の教師は、白色の部分　雲や民家の壁なんか　を指して、「ここは、色を塗ったか」と聞いた。「塗ってない」と答えると、「それじゃダメだ。白い部分は白色の絵の具を塗らないといけない」と言い、ボクにやり直しを指示した。

素直にボクが、白色の部分に絵の具を落とすと、あの画用紙独特のボコボコした質感が目立たなくなったので、ボクはすぐに色を塗るのをやめた。ただの白よりも、ボコボコした白のほうが好きだと気づいたからだ。

そのまんま、白を塗りつぶすことなく、ボクは時間が来るまで、ぼんやりと過ごした。

思うに、あのボコボコがあるからこそ、あの絵はボクの作品だ。もし、あのボコボコを塗りつぶしていたら、ボクは心のどこかで、あれを自分の作品だとは、認めないだろう。

彼女は、ボクよりも人に評価される絵を描けるだろうが、果たしてそこに、彼女にとってのボコボコは在るのだろうか？　もし、それが無かったとしたら、仮に、彼女の名前を鈴木涼子として、どんなにいい絵を描いても、それは鈴木涼子の作品ではない。どこかの優等生が描いた、良い作品にしか過ぎない。

ボクはそんなことを思い、勝手に彼女のことを心配した。ときに彼女の行動や、考え方に口を挟んだりもした。やがて、そんなこと関係なしに、ドンドン、ドンドン狭まって、身動き取れなくなっているように見える、彼女のことを見て、バカだと思うようになった。

一度だけ、彼女とボクは、意見の違いで衝突したことがある。そのときは、もうそれなりに長い付き合いだったが、彼女は相手の思いを汲み取るサイボーグ、ボクはお調子者の八方美人だ　野球のことなんて、一切興味ないが、熱狂的な阪神ファンと、タイガース

の魅力について2時間語り、最終的には一緒に『六甲おろし』を歌うぐらいの　そう簡単に衝突なんてするはず無い。

ボクには、どうしても納得出来ないことを言う彼女に、「理解出来ないけど、君がそう思うのなら、そうすればいい」と投げやりと言うと、彼女は自分の考えを返してきた。それも、珍しく熱っぽく意外だったし、ボクからしてみれば、「そう思うのなら、そうすればいい」という言葉で、結論は出ている。これ以上その事についてなにか話す必要があるとは驚きだった。

「ココがヘンだよ日本人」に出てた、外国人連中からしてみたら、あいさつ程度の会話だと思うが、日頃温厚なボクらからしてみれば、ケンカと言っていていいやり取りだったと思う。どうしたって分かり合えない、唯一結論が出るとしたら「勝手にすればいい」という所にしかたどり着かない、意見の違いをやり取りした後、ボクは再び「理解出来ないけど、君がそう思うのなら、そうすればいい」と言った後、今度は「バカだなあ、と思うけど」と付け足した……それで、出来るだけトゲが立たないように、「バカだな」の後に、小さい「あ」をシツカリ入れた。「私は逆に、あなたの考え方を、バカだなあ、と思うけど」彼女もシツカリと、小さい「あ」を入れて、そう返した。

それから、しばらくの間、ボクはふて腐れていた。「バカだなあ」と言われたことに対してではない。彼女が、物事の優先順位をつけられないことに対してだ。

彼女には、なりたいたいものがある。それは、ボクが『小説家』になるよりは、うんと現実的なことだと思うが、それでも、誰もがそう簡単になれるものではない。

ボクは、何かをするためには、何かを犠牲にしなければいけないと考える。夢を叶えるとか、そんな大げさなものじゃなくても、誰かと楽しく過ごすにはとか、メシを食うためには、自分のためには、親のためには、とにかく日頃から、何かを取って、何かを捨てる選

扱の連続だ。彼女はそれが、ちゃんと出来ていない。それが出来なければ、なるうと思うものになんてなれない。それどころか、自身ですらいられない。そう思った。

それと、数ヶ月前から気づいていた、彼女の優先順位の中で、ボクが存在が、目に見える速さで、下がって行っていることが、無視できなくなつたからだ。その理由を、ボクは自分自身のせいだなんて考えもしなかった。彼女の周りにいるバカのせい。お人好しすぎる彼女のせい。そう思った。

そんなことを考えて、勝手に腹を立てるのは、決まってひとりで居るときだ。ボクは元来、ノーテンキな性格だし、彼女は平和な、人をのんびりさせる顔をしている。

優先順位をつけられないせいで、無駄に忙しい彼女と、久しぶりに会つた夜に、ボクは昨日までの、胸にあつたモヤモヤは何処へやら、「今日はどんな、楽しいことをして過ごそうかな」ヘラヘラと、そんなことを考えていた。

その矢先、突然泣き出した彼女は、血を吐くよりも苦しそうに言った。

「……実はね……あなたの他にも、好きな人が居るのよ……」

その一言だけで、ボクはすべてを理解した。

そして、意外にも冷静に、“なんだ、このやろう。ちゃんと優先順位つけてたんじゃねえか” そんな、ことを思っしながら、ずっと前に、「おにぎりを買ってきて欲しい」と言われた時にも似た、おかしな安心感のようなものを覚えた。

*

この、文章を書きながら、彼女は『バカ』に見えるけど、本当はボクなんかよりも、よっぽど頭がいいことを思い出した。

エッセイのタイトルの意味に、サンチヨ・パンサのように間抜け

な男が書いているから、というのも付け足しておいじ。

ラーメンキング

『ラーメンキング』

この人にだけは、なりたくないな。

そう思う人が、知り合いに一人いる。彼はボクより2つ年下で、これを書いている現在、28才。彼のようになりたくないと言っても、彼の性格やルックスに問題があるわけではない。むしろ、彼はナイスガイと言っていい男だろう。

ただ、彼のように、不幸に気に入られたような人間には、なりたくない。

ボクらのような、徒手空拳で行き当たりばつたりの生き方をしている人間にとつて、ツキがないというのは大問題だ。

彼と初めて会ったのは、中学生のとき。ボクが中三で、彼が中一だった

彼の兄貴とは、その前から面識があった。まあ、面識と言っても、なんだか顔を会わせたことがある程度だったが……。中一の3学期途中、中途半端な時期に転校してきた彼の兄貴は、ボクとは違うほかのクラスだったが、新しい学校の指定している、背中に背負うタイプの通学用靴を買ってもらえず、ずっと前の学校指定の、手から下げるタイプの皮の靴を使っていたのが印象に残っている。

1学期途中で転校してきて、新しい靴が買ってもらえず、ずっと前の学校の、肩からたすきがけにするタイプの靴を使っていたボクは、自分以外にも、みんなと違う靴を使っているヤツがいて、なんとなく安心したのを覚えている。思春期の子どもにとつて、どんな些細なことでも、みんなと違うというのは心地が悪い。

その後、ボクと彼の兄貴が3年生に上がる年に、ふたつ下の彼と、ボクの弟は同じ中学校の新入生になった。その頃にはボクは学校に通うのを辞めていて、彼が学校でどんな生徒か、彼の兄貴はいい加

減、新しい鞆を買ってもらえたのか？ 学校でのことは何も知らなかったが、たまたまボクの弟と彼の仲が良かったおかげで、彼のプライベートな部分を知る機会がなんどかあった。

家庭環境は最悪で、彼はいつも腹を空かせていた。彼がウチに来ると、どれだけ炊いていても、炊飯器の中から米が無くなると、よく母がボヤいていたのを覚えている。

ウチは母とボク、弟がふたりという家族構成で、彼は父親と兄、妹という構成だった。彼の母親は、子どものことよりも好きな男と一緒に、大阪で暮らしていた。なんどか見たことのある彼の父親は、顔全体を覆うように髭が生えていて、いつも作業服に長靴といういでたちで、暗い表情をしていた。

お互いに訳ありの家庭で育ち、互いに次男坊で、互いに排他的な田舎町によそから転校してきた。ウチの弟と彼が仲良くなったのは、当然のこと、似た部分に共鳴するものがあつたんじゃないかと思う。

いまどき、家にシラミが湧いて、彼と兄貴は坊主頭に、妹はかなり短い髪型になっていたことがある。

彼はウチの弟を含む数人と、悪さをして、補導されたことがある。その時に警察に迎えに来た父親に、他の保護者や警察の人が必死に止めるほどボコボコに殴られた。

彼は家庭に問題があるが、一般的に言う不良のようなタイプではなく、荒んだ空気を出している分けでもなく、むしろおとなしい性格だったため、問題児連中の中では、比較的軽い扱いを受けていたように見えた。

彼の家にはよく、児童福祉司が尋ねて来ていた。

その内に、彼は家に帰らなくなり友達の家を転々とするような少年になったが、どの家も、当然のことながら中学生の家出少年を長居させてはくれなかった。

ウチの親は、比較的にそういったことに寛容というか、放任主義を貫くため、彼が泊まりに来て、前記した「炊飯器の米がなくな

る」とボヤク意外、なにかを口うるさく言うことも無かったので、なかなか長い期間、ウチに泊まっていたが、その内に、学校では問題児扱いの弟の友達連中が溜まるようになると、教師やPTAから目をつけられるようになり、頻繁に先生や保護者がウチに見回りに来て、子ども達を家に帰すように注意するようになった。すると彼は氣を使つてか、ウチに泊まることも無くなった。

学生時代の最後のほうは、彼はほとんど家に帰らず、万引きをしたり、寺や神社の賽銭を盗んだりしながら、飢えをしのいだ。道端で寝て夜を明かし、冬の寒い日なんかは、マンションのエレベーターの中で寝て、たまに夜中、マンションの住人の乗り降りがあると、その音で目を覚まし、逃げるように別の場所へ移つて、睡眠をとつたそうだ。

中学校を卒業してからの、彼の生活については詳しく知らないが、卒業後お金を貯めて大阪に行き、母親の側で暮らしていたと聞いた。

彼が中学校を卒業してから、13年も経つたある日、ひよんな場所まで彼と再会した。

正月開けに、弟と一緒に、地元である田舎町の温泉に行ったときに、偶然、彼も居たのだ。

弟は彼が地元に戻ってきていることを知っていた様子で、とくべつ驚いた風もなく、ボクに「全然変わってないだろ」と彼のことを紹介してくれた。

たしかに彼は、少年だったころと、あまり変わっていないかった。人並み以上に苦労しているはずだが、年の割りに、幼い顔をしていた。

妙にテレくさそうに「久しぶりです」だかなんだか、そんな挨拶をしてくれたが、2日半前に、婚約者にフラれて、感情が壊死していたボクは、懐かしの再会に感動することもなく、口の中でなにかつぶやいて、会釈を返しただけだった。

その年、東京から地元へ引き上げてきた弟と、大阪から引き上げてきた彼は、10年以上過ぎた時間なんか関係なく、昔みたいに、一緒につるむようになった。

ある日、弟の口から、彼が自分でシヨットバーをやると聞いて意外に思った。彼はバーをやりそうなタイプではない。どちらかといえば技術職　なにかを黙々と作らせたり　そんなことの方が似合いそうなイメージがあった。

彼の母親の夢が、自分で飲み屋をやることなのだそうだ。特別なかやりたいたいことがあるわけではない彼は、その母の夢を自分が叶えてやろうと思ったそうだ。

店の経営が軌道に乗れば、ゆくゆくはその店を母親に譲る。そんな風に思ったらしい。

店をオープンするための準備を進めている矢先に、彼の母親は死んだ。原因は男に浮気をされたことだった。首を吊って自殺した。

死体を発見したのは彼だった。

彼には大きな心の傷と、やる理由のないバーが残された。

人の親や、死んだ人のことを悪く言うのは無粋なことだと分かっているが、その話を聞いて、ボクは、「最低のクズ」彼の母親のことをそう思った。

母親が自殺して以来、彼はひどい心の病気に掛かった。

急に床を舐めだしたり、夜中に彷徨うようにほっつき歩いて、中学生の頃のように道端で寝たり。

それでも彼は、予定通り店をオープンさせ、安いだけで接客も何もない店だったが、営業を続けた。

彼の心の傷の深さを見るほどに、好きでもない仕事を続けている姿を見るほどに、彼が母親をどれだけ愛していたのかを、見るような気がした。

子どもを捨てて、男を愛したような女でも、彼にとっては母親だった。彼は、親が子を思う気持ちよりも強く、母親のことを愛していた。

その年の夏に、ボクは呑気に地元の商店街で毎年行われているラーメン早食い大会に出場した。

8月の毎週土曜日に行われていて、最後の週には各週の優勝者を集めてのグラントチャンピオン大会まで行われる。

傍から見れば、だいぶどうでもいい催しに見えるだろうが、商店街の人からしてみれば、一大イベントだし、これが、いざ出場してみると思いのほか熱くなる。

たまたま商店街で店をやっている人と知り合いだったボクは、誘われるがまま8月最初の週の大会に出場した。

もともとボクは早食いに向いているようなタイプではなく、結果は惨敗だったが、その話を聞いた弟が、面白そうだから出場してみたいと、翌週の大会に友達連中を大量に連れて出場した。その中に、彼も居た。

5つほどのグループに分かれて、順にラーメンを早食いしていくのだが、普通の人で大体たいらげるのに2分強かかる。(ちなみに、先週の優勝者は、前年度のグラントチャンピオン大会2位という実績を持っている 51秒という記録を出していた)

10人ほどいた弟の友達連中が平凡なタイムで敗退していく中、最後から2番目の組で、彼の順番が回ってきた。

これだけ居れば、誰か優勝できるだろうと、最初は意気揚々としていた友達連中も、この頃になると意気消沈して、あきらめムードが漂っていた。

そんな中、彼は揚々とヤキソバを食べながらステージに現れた。進行係に食べかけのヤキソバを渡し席に着く。かなり躁の状態に見える。

その姿を見ながら、彼の病気を知っているボクは、なんだかヒヤヒヤした。

観覧席の最前列に、彼のことを応援する男女の姿が見えた。男は痩せ型のボクから見ても、異常に痩せていた。

彼の友達かと思ったが、後から聞くと彼の兄貴と妹だった。

これもあとで聞いた話だが、痩せすぎに見えた彼の兄貴は、病気で
大腸だか小腸をほとんど摘出していた。

その話を聞いたとき、やはり彼ら兄弟は不幸に気に入られている。
ボクはそう思った。

司会者が順に出場者のことを紹介し、スタートの合図がなった。

それは、本当に一瞬の出来事だった。目を奪われる暇もなかった。

実際にボクが他の出場者のことを見ている間に終わった。

驚きの声に気がついて目を向けると、彼はカラになった器を掲げ
ていた。

体感ではスタートの合図が鳴ってから、30秒も経っていないよ
うに思えた。

彼は他の出場者が一生懸命ラーメンを食べるのを尻目に、預けた
ヤキソバを取り返すと、残っていた分を一気にかき込むというパフ
オーマンスまでやってのけた。

司会者が彼のタイムを讀上げる。感嘆の声が起こった。

「50秒ちょうど」

先週の優勝者のタイムを、わずか1秒だが更新していた。

ボクらは生気を取り戻した。ステージから戻ってきた彼を、仲間
が取り囲むなか、彼の兄貴がやって来て、人垣をかき分けて彼とハ
イタッチした。

しかし、すぐにボクらは緊張した状態に落とされた。

最終組に去年のグラントチャンピオンがいると司会者が言ったの
だ。グラントチャンピオンの持ちタイムは41秒だと、信じられな
いことも言った。

41秒！！ それだけの時間で、器まで熱せられた、熱々のラー
メンを食べきれぬ人間が居るとは、とても信じられなかった。

観覧席の隅に、先週の優勝者が居るのを見つけた。 昨年のグ

ランドチャンピオン大会準優勝の男が、今年もチャンピオンの座を
争うであろう相手のことを見ていた。

滑稽なようだが、彼らはこれに命をかけている。スポーツ選手が競技にかけるのと同じように。そんな大袈裟なことを思った。

スタートの合図が鳴り、チャンピオンがラーメンを食べだした。早かった。持ちタイムでは、彼のことを上回る男に、ボクらの視線は集中した。

ボクは心の中で祈った。まるで、競輪に行つて、最終レースに有り金を全てつき込んだ時のような心境になった。

上げられて落とされる。良いことなんて続きはしない。いつもそうだ。ボクも弟も、彼も彼の兄貴も妹も、ボクらはいつも、なんだって最終的には無常な結末になることを知っていた。一生一緒にいると思つていた女性を、他の男に奪われたり。幸せにしようと思つていた母親に死なれたり。

そんな経験から、ボクらは誰も、疑いもなく勝利を信じるなんて無垢なことは出来なかった。

グランドチャンピオンがスープを飲み干し、空になった器を掲げた。

ドキドキした。

司会者がタイムを読上げる。

「1分！」

その瞬間、友達連中は勝どきを上げ湧き上がった。

グランドチャンピオンは苦笑いを浮かべ、少し首をか上げた。

準優勝の男は、チャンピオンから、彼に視線を移していた。彼を見つめる眼差しは、“活きの良い若手が現れたな”そんな風に思っているように見えた。すでに、グランドチャンピオン大会での彼との対戦を見据えているようだった。

彼は、笑っていた。浮かれる仲間に囲まれて、「ラーメンキングだ！！」と囃し立てられる中で、

悲しいことなど、何もないかのように、

彼は笑っていた。

右腕の時計

「右腕の時計」

ちよつとしたキツカケで、ひよんなことを思い出すことがある。集中力が散漫な時など特に。

先日、叔父さんに手紙を書こうと思い立ったが、ボクの部屋には机がないので、わざわざカフェまで行った。机が無いというのは半分言い訳で、小説家志望というクセに、筆不精なので、カフェに行くなり何なりして、やらなければいけない状況を作らなければきつと途中で投げ出すと思ったのだ。

深夜働いているボクは、仕事前によく、遅くまでやっているカフェに立ち寄って、いつもは窓側の席で、表通りを眺めながらボンヤリと時間を過ごした。

この日は、いつもと違う席に座った。そちらのほうが椅子が柔らかくて、落ち着きそうだし、窓際の席なんかには座れば、結局いつもの通り、ボンヤリと過ごしてしまいそうな気がしたのだ。

コーヒートをテーブルの隅っこに追いやって、手前に出来たスペースに便箋を広げる。文房具が好きなボクは、あまり使う機会もないのに、何種類か便箋と封筒を持っていたが、その中からとびつきり特長の無いやつを選んで持ってきた。叔父さん相手にシヤレたデザインのものを使うのもオカシな気がしたし、宛先が刑務所なので、なんとなくだが、シンプルなものの方が相応しいように思えた。

紙にペンを走らす前に、邪魔なので右腕にはめた腕時計を外し、左に付け替えた。いつの頃からか、ボクは右利きなのに、腕時計を右腕にはめる。

ふと、（なんでだろう？）と思い、理由を考えてみたが、自分が右腕に時計をはめるようになったキツカケが思い出せない。

（左利きに憧れてという分けでもないだろう……）そう考えたとき

に、昔、時計を右腕にはめているせいで、「左利きですか？」と聞かれたことを思い出した。

どこだったか、相手が誰だったか、少しばかり考えたあと、色々なことを徐々に思い出した。

相手は男が1人に女が2人の3人連れで、当時八タチかそこらだったボクよりは、みんな年上だった。名前は思えだせない。もしかしたら名前なんて聞かなかったかもしれない。場所は居酒屋。チェーン店ではなく、個人経営で。なんでそんな場所に居たのか……。 (ああ、なるほどな！ 山ちゃんのところだ！)

そんな具合に、少しずつ思い出していくうちに、居酒屋へ行った理由や、なんとはななくだが店のつくりは思い出せて行くが、結局、腕時計を右腕にはめるようになった理由は思い出せなかった。

(山ちゃん。そんな男が居たなあ)と、少し懐かしく思った。

彼は、ボクより20以上も年上で、知り合った頃には、すでに中年だった。当時ボクの母親が付き合っていた男の、古くからの友人であり仕事仲間だった。

人が良さそうと言うのとは、ちょっと違う、おとなしくて気が弱そうな顔をしていて、実際に、まあそんな性格だった。

彼は長いこと建築技師だかんだか、そういった仕事をしていて自分で個人事務所を持っていたが、経営が上手く行かなくなり事務所を潰し、知り合いのついで、現場で働くようになった。元々、肉体労働が出来そうなタイプには見えなかったし、ボクが聞いたことのある評判では、現場で弱音ばかり吐いて、お世辞にも使い物になるとは言えなかったそうだ。

その後、長年飲食の仕事をしてきた経験のある知人に誘われて、前記した居酒屋の共同経営を始めた。オープンの日に、一度だけボクはこの店に行き、そこで隣り合わせた席に居た3人組と会話を交わすうちに、利き腕の話になったのだ。

従業員も雇っていない小さな店なので、居酒屋の共同経営者と言っても、山ちゃんはウェイターとして、せっせと働いていた。もう

一人の経営者が、調理の担当だった。

しかし、元々仕事をバリバリ頑張るといふタイプではなく、おまけにまったくの未経験で、いい年をして飲食の仕事を始めた彼は、これもすぐに音を上げだした。

飲食業の大変さは、ボクも知っているし、山ちゃんに関しては、もう一人の経営者にいいように利用された。話を聞く限りそんな印象を受けた。

細々とだが、なんとかやっていた事務所が潰れ、向かない肉体労働をし、それに耐えれずに、上手いこと口車に乗せられて、なれない仕事に手を出した。対等であるはずの共同経営者だが相手との間に主従関係が出来ていた。それは、その仕事に対しての経験だけでなく、山ちゃんの性格、相手の性格も大いに関係しているように思われた。

（バカなヤツめ！ 自ら金まで出して逃げ道を塞いで、こき使われる立場になるなんて！）彼は、じっと耐えるべき時に、下手に動いた。それも自分の守備範囲の外に。そんな風に冷たくも思うが、少なからず、ボクは彼に対して親近感を持っていた。それは、仕事というものに対しての、意気地のなさ、それよりも出来るだけ趣味の時間を作って、本を読んだり、音楽を聴いたりという事に人生の充実を満たすタイプという共通したところから来るように思う。

しかし、気楽なボクと違い、彼には家庭があった。 なんとか会ったことが在るが、彼女には感情というものが有るのかな？ と心配になるほど、異常に大人しくて、無口な奥さん。その奥さんに良く似た、小学校2、3年生ぐらいの長男。顔も、くしゃくしゃのクセ毛も、いつもヘラヘラと笑っている表情も山ちゃんそっくりなようやく歩けるようになった次男。

同じようなタイプでも、ボクはまだ若く、責任を持たなければいけない物なんて何もなかった。彼は、もう若くなく、なんとか家庭を維持しなくてはいけなかった。もしかしたら、彼はボクのことか羨ましかつたんじゃないかな。そんなことを思う。

彼はボクのようにフラフラとしている分けにはいかなかった。

家で山ちゃんと、ボクの母親と、母の彼氏。3人で酒を飲んでい
たことがある。酒を飲むと、いつものことだったが、その内に、母
と彼氏が口論を始め、面倒くさくなつた山ちゃんは、「避難させて
くれ」とボクの部屋へ入ってきたことがある。

山ちゃんは程よく酔っ払っていた。

彼は部屋にあつたアコースティックギターを見つけると、「昔、
フォークをやっていた」といい、ギターをいじりだした。

夜中だったので、音を心配したが、そんな心配必要なく、彼はま
ともに音を鳴らせなかった。

「ダメだ。むかしは弾けたのに……。10年も20年も弾いてない
から、指が動かないや……」

そんなことを言っていた。別に寂しそうではなかったが、なんだ
か恥ずかしそうだった。

「お邪魔したね」そう言つて、立ち上がった山ちゃんのズボンに、
米粒が沢山こびり付いているのにボクは気づいた。

どうでもいい事だが、そんなことを覚えている。

知り合いというよりも、知り合いのしりあい。ボクは山ちゃん
のことをここに書いた以上にはなにも知らない。書いていることだつ
て、わざわざばかりの交流で勝手に感じたことと、周りの人から聞い
た話がほとんどだ。

彼が死んでから、もう何年も彼のことを思い出さなかった。死因
も思い出せない。もしかしたら、ボクは、時計を右腕にはめてな
かったら、2度と彼のことを思い出さなかったかもしれない。

残された、彼の奥さんと、小さな息子たちは、今どうしてるのだ
ろうかと気になった。

ちょっとしたキツカケで、ひよんなことを思い出す。ボクは時計

を眺めながら、右腕に巻くようになった理由は結局、思い出せなかったが、それよりも大切なことを思い出した気になった。それだけで、右腕に巻いていた意味はあったなと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1021/>

ドンキホーテ・サンチョパンサ

2011年12月24日21時52分発行